

経営者への活きた言葉

禅の修行で無限の可能性が生まれる

1. インドに生まれた達磨大師が中国で興した禅は、中世日本の武家社会で花開いた。今や世界に広がる禅がサンスクリット語音の「ディヤーナ」でも中国語音の「チャン」でもなく「ゼン」なのは、現代の禅が3大禅宗(臨済宗、曹洞宗、黄檗おうぼく宗)を中心とする日本の禅に由来するからだ。人間は誰しも何かを失う不安を持っている。地位が高い人、多くを持つ人ほど不安が大きいのは自然なこと。そうした負の思いを受け流したり、それに立ち向かう勇気をくれるのが禅なのである。
2. 花園大学学長で龍雲寺前住職の細川景一師は、「禅の修行では従来の価値観をいったん壊し、ゼロ(無)から出発する。物事を考える際、 $1+1$ が 0 であったり、 $2+3$ が 7 及 10 であったりと自由な発想が生まれ、そこに無現の広がる可能性が出てくる」とする一方で、「坐禅中に睡気や惰気を振り払うため、股に錐を刺したという話もある。禅は自分との戦いであり、厳しい忍耐力と強い意志力が養われる」と語る。
3. 禅の根本的な考え方である「即今そっこん、当処とうしょ、自己じこ(今、ここで自分が生きることを大事にする)」。すなわち、先々を追いかけるのではなく、「日々の仕事にきちんと向き合うことが明日につながる」という理念が、変化のスピードが速い現代社会を生きるビジネスパーソンの心をつかんである。

(参考:「日経ビジネス」2013年12月16日号)

経営者のための経済学

就業者数は微減を続ける 藻谷 浩介(日本総合研究所主席研究員)

1. 「アベノミクスがもてはやされているが、内実は公共工事の大盤振る舞い。旧態依然の政策頼みではないか」というのが、私の会う多くの経済専門家の見方だ。確かに、円安による輸出企業の収益改善効果一巡した2013年5月以降は株価が横ばいで、輸出も小売販売額も勤労者世帯の所得も横ばいだ。そんな中でGDPが増えているのは、公共工事の成果だというのだが、これとてどれほどのものだろうか。
2. 公共工事の増額が個人消費の増加につながらないことは、「失われた20年」が証明している。公共工事が有効求人倍率や失業率を改善することはあっても、就業者数そのものを増やすことはないからである。国内の就業者数は足元では約6300万人。1997年の6600万人をピークに、長期的に微減を続けている。多年の少子化の結果、現役世代の数が、1990年代後半から減少に転じたからだ。

(参考:「週刊東洋経済」2013年12月7日号)